月明かりの夜

aisa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月明かりの夜

【Ｎコード】
Ｎ１３９９Ｚ

【作者名】
ａｉｓａ

【あらすじ】
有栖川咲音が通っている紅城高校は、少し普通の高校と違っていた。
２年の各クラスに一人ずつ、クラスの裏のトップである「級長」が存在する。
それは誰も逆らうことの出来ない存在で、この地域の不良を統括する者達でもあった。
この組織を全面的にバックアップしているのは、紅城生徒会。

実は紅城高校は学校全体としての地位が高く、
生徒会は市内の高校同士の抗争などを調整する役割を果たしていた。

しかし、紅城生徒会が築いてきた均衡が崩れつつあった。
近頃勢力を伸ばして来た、斉河高校の赤是竜雅。彼の目的は、紅城の地位を乗っ取ること。
不良達の熾烈な戦いが始まった。

だが、不良とは何の関係もないはずの咲音も、この争いの渦に巻き込まれていくのだった…。

基本的にシナリオ重視のラノベ的作品です。
気軽に読んでいただければと思います。

第1話　荒れる新学期

太陽はきっと…
私達を照らしてくれない。
私達は輝く必要なんかない。

本当に正しいことを、
知っているから――…

＊＊＊

とある街の、とある学校。季節は春。新学期である。

薄く緑の香る午前、暖かな陽の差す教室。
有栖川咲音（ありすがわ さくね）は、紅城（こうじょう）高校の二年生に進学した。
新しいクラスは、2年C組。

――うわ、嫌だなこのクラス…

教室の窓側の席から新しいクラスの面々を見渡す。穏やかな陽日とは裏腹に、教室の中の咲音はうな垂れた。
不良が多いと言われている紅城高校の中でも、このクラスは一段とガラの悪そうな生徒が揃っているような気がする。

やっぱりこんな高校に入学するんじゃなかった、と、咲音は一人溜め息をついた。

咲音は性格は真面目な方で、軽くウェーブのかかった茶色いロングヘアーや有栖川という苗字から、一部の人には「アリス」と呼ばれることもある。今まで自分が苛められた経験こそないが、あまり気の強くない咲音は不安に包まれていた。

「咲音…なんか今年ヤバそうだね…」

そう声をかけて来たのは、一年の時一緒のクラスだった速水亜弥加(はやみ あやか)。今このクラスに、咲音が友達と言えるのは亜弥加しか居ない。

「うん…なんか男子も女子も怖い人がいっぱい…目つけられたらどうしよう」

「大丈夫だって！あんたが苛められる訳ないじゃんっ」

亜弥加は笑うが、咲音の不安は拭い切れない。

金髪、ピアス、派手なファッション…

1つのクラスにここまで集結しているのだ。1年の時は居ても4，5人、今はクラスの3分の1を占めている。

もしかして、2年になって皆はっちゃけたくなっちゃったとか？

ハァー…

溜め息が出るばかりだった。

そして咲音はチラッと廊下側の後ろの席を見やった。そこで数人の女子達と会話をしている少女――徳森那津希(とくもり なつき)。彼女は紅城イチの不良娘として有名だった。化粧が濃く、オレンジに近い髪色、独特の

ショートカットや身に着けているたくさんのアクセサリーで、彼女はその存在感を増していた。咲音はその所業について詳しくは知らないが、とにかく恐ろしい。

絶対目合わせないようにしよう…。

咲音はそう心に決めた。

＊＊＊

始業式の次の日・いきなり席替えが起こった。

「！？」

窓側の後ろの方の自分の席を、完全に占領されている。自分が間違えたのかとも思ったが…

――ううん、合ってる！絶対！！

咲音は恐る恐る不良グループのような男子達に近づいた。

「あ、あの…そこ、私の…」

男子達は非常に盛り上がっており、咲音の小さな声はかき消される。

よしっ…

咲音は勇気を振り絞った。

「そこ、私の席なんですけど」

今度はちゃんと聞こえたはずだ。だが…

「あーゴメン、そこらへん座っててよ」

咲音の席に座っている男子がほとんどこっちを見ずに言った。

「うえ、あの…」

咲音は適当にあしらわれてうろたえる。既に男子の意識の中に咲音の存在は無い。

「咲音、しょーがないからここ座ろーよ」
振り返ると、亜弥加が居た。
「亜弥加ぁ…」
結局、2人でその前の席に隣で座ることにした。
見れば、後ろの席はほとんど派手な格好をした人達が占領している。
他の人達も、咲音と同じような目に遭って適当に座ることになった。
――こんなんでいいの…？

昨日の始業式で発表された、担任の米久(よねひさ)先生が教室に入ってきた。
眼鏡をかけガリガリに痩せた姿は、なんとなく弱そうな印象を与える。
「…席が変わっているような気がするのは気のせいですか？」
教室を見渡し、先生が言った。
「気のせーです！」
1人の女子生徒が言い放つ。後ろの方から笑いが起こった。
「とりあえず、元の席に戻りなさい」
「えーヤダ、たるいし。ねぇ？」
「だよねー、つか元の席に戻る意味がわかんないし」

また笑い声。

「何か不都合でもあるんですかー先生」
今度は男子生徒が言った。
「いいから、戻りなさい」
「っせーな」
ある男子が机を蹴った。
「さっさと話始めろよ。なぁ、コメクサ」
「な…」

「あっはは、コメクサとかマジウケんだけど」
後ろからまた一段と笑いが起こった。
――笑…えないから。
咲音とその他前の方にいる生徒達は、皆しんとしている。
新学期早々、最悪だ……

＊＊＊

ピッ

「もしもし～？」

ある日の昼休み、校舎に設置されているテラスで誰かと電話している男子。A組の生徒だ。
この男子もツンツンに立てた金髪、制服着くずし、1年の頃は相当暴れたという問題児。

「転校生？ふーん、お前んとこからかァ」
彼は長らく話した後、
「そんなコがねェ…楽しみだな」
ニヤリと笑った。
「うちのクラスじゃねーと思うよ、人数足りてるし――ん？…まぁな、とりあえず様子見とく」
そして、ククッという笑い声。
「もしかしたら俺の敵になるかもしんないしね」

＊＊＊

憂鬱な気持ちを抱えながら、咲音は電車を降りて歩いて学校に向かった。

すると少し先に、公園の前にしゃがんでいる少女の姿が見えた。
肩までのハネのある黒髪で、咲音と同じ制服を着ていることがわかった。
――見ない顔だな…いや、うちの学校の生徒を全員知ってる訳じゃないけど。…新入生かな？もしかして、転校生…？
気になった咲音は、思い切って声をかけてみた。
「あのっ、何してるの？」
その時、少女に撫でられている猫が目に入った。
「捨て猫…？」
「…うん」
少女は一瞬咲音を見、猫に視線を戻して言った。するとすぐに立ち上がる。
「この高校の子？」
少女はすぐ近くにある紅城高校を指差して言った。
「う、うん。そうだけど…」
「…そっか。じゃあ宜しく」
彼女は少し微笑んだ後、学校へ小走りにかけていった。

「あ……」

彼女の後ろ姿を見送ってから、猫を見た。
「早く飼い主見つかると良いね」

そう言って、咲音も学校へ向かった。

＊＊＊

始業のチャイムが鳴り、米久先生が入ってきた。昨日から一部の生徒には「コメクサ」と呼ばれている。
「えー、新学期が始まったばかりですが、転入生を紹介します」
先生の言葉に、教室が少しざわついた。

――転入生か…この高校に、しかもこのクラスに…可哀想に。
咲音の頭にはそんなことが浮かんだ。そしてピンと来た。あの子だ。

先生の合図で教室の扉が開き、入って来たのはやはり咲音が今朝会ったあの少女だった。
「神名咲夜（カンナ サクヨ）です…宜しく」
咲夜という名の少女は、小さく頭を下げた。
「なんか…あの子怖くない？」
「うわ、こっち睨んでんだけど」
教室の後ろから、ひそひそとそんな声が聞こえた。
――まずい。転入生は苛められる確率７５％！！うちの学校では！！
咲夜は小声で会話する生徒をギラッと睨みつける。
「うっわ。怖っ」
誰かがそう言った。
咲音はあわあわとしながら咲夜を見つめた。
さっき猫を撫でてた時は、あんな雰囲気全然無かったのに…。

先生は顔をしかめただけで、何も言わなかった。
「では、そこの空いている席に座りなさい」

一番後ろの真ん中の席という中途半端な席が空いていた。不良達が男子と女子で右と左に寄ってそうなったのだ。その席のすぐ隣はあのタチの悪い徳森那津希達のグループだった。咲夜が席に座った瞬間、彼女達はあからさまに不機嫌な顔をした。

――だ、大丈夫かな…

＊＊＊

休憩時間…

咲音はなんとなく心配で、自分の席から咲夜を見つめた。距離は2，3mくらい。

早速那津希達が声をかけていた。

「神名さん、顔怖いよ？」

リーダー格の那津希がクスクス笑いながら言う。

「あははは、もっとリラックス～♪」

そう言ったのは那津希の側にいつも付いている鈴原莉奈（すずはらりな）。

「もしかして怖がってんのかもよ？」

一段と派手で背の高い坂蔵（さかくら）カナが言った。

「やだーそれダサすぎだし」

続く神崎茜（かんざきあかね）の一言に、笑いが起こった。

他の2人も笑いに混ざっている。

そんな声は全く聞こえていないかのように、咲夜は黙って本を読んでいた。

咲夜を取り囲んでいるこの女子6人組が、C組の所謂女子不良グループだった。

「ほら無視しないしない」
那津希が咲夜の本をバサッと取り上げる。
「神名さんさぁー…って、何」
咲夜は真っ直ぐに、那津希を睨みつけた。
すぐに席を立ち、教室を出て行ってしまった。

「あっ…」
――咲夜ちゃん…

「何あの態度」
「転校生のくせに。せっかく話し掛けてやったのに」
6人組は口々に悪態をつく。
「ビビってんじゃないの？」
「うわーウケんねそれ」
「からかうの楽しーじゃん」
また笑いが起こった。

「――ねぇ亜弥加、まずいよ…」
「何が？」
「咲夜ちゃん！このままじゃ徳森さん達にずっと絡まれるって！」
「あー…」
「私、話し掛けてくる！」
とは言ったものの、咲夜は休憩時間の度に那津希達に絡まれていて、
咲音が話し掛ける隙も無かった。咲夜はその間一言も口を聞かなかった。

そして、放課後…

「神名さーん、どっか遊びに行こーよ」
カナがまた、わざとらしく声をかける。
咲夜は無視を続け、鞄を持って教室を出ようとした。

「ちょっと」

那津希が呼び止めた。
「あまりにも愛想が悪すぎんじゃないの？そんなんじゃ友達出来ないよ」
「お前らなんかと仲良くする気は無い」
「な…」
そう言って、咲夜は教室を出て行った。

「ウザー…」
「何あいつ、調子乗ってんじゃないの」

「おー…」
「何？咲音」
「いや、咲夜ちゃん、カッコいいなぁって…」
「ふーん…まぁ、あの様子ならイジメられることはないんじゃない？」
「んー…そうかなぁ…」
咲音はまだ心配だった。
――どうしてあんなに突き放すのかわからないけど…今朝のあの笑顔は優しかった。
私は咲夜ちゃんの優しさを知ってる…だから、私が友達になってあげなくちゃ！！
咲音はそう決意した。

＊＊＊

次の日、咲音が朝学校の廊下を歩いていると前を行く咲夜が目に入った。

「あ、咲夜ちゃん！おはよっ」

咲音はすかさず駆け寄り、ニッコリ笑って挨拶をした。

「あぁ…おはよ」

――…そっけない。いきなりちゃん付けは馴れ馴れしかったかな？

「あのさ、この前の猫…」

「ん？」

――私のこと覚えてくれてたんだ…良かった。

「居なくなってた…。ダンボールに敷いてあった布もなくなってたから、多分拾われたんだと思う」

「…そっか！良かったぁ」

「うん……」

咲夜は少し微笑んだ。

――忘れてた。でも猫の心配してたとは…やっぱり咲夜ちゃんは良い子だ、うん。

「あ、そだ、私有栖川咲音。宜しくね」

「アリス…？」

「うん、時々そう呼ばれるんだ。あはは」

「そっか」

咲夜もクスッと笑った。

その時、後ろから2人の女子生徒がやってきて、1人がいきなり咲夜に肩をぶつけた。

――と、徳森、さん…

ぶつかって来たのは那津希。と隣には莉奈。
「神名さん、友達なんか要らないって言ってなかったっけ？」
「そうは言ってないだろ」
「あたしらはダメなのに、アリスちゃんなら良いんだ」
那津希は皮肉っぽく言う。
「お前には関係ない」
「…っ…調子乗りすぎじゃない？ウザいんだけど」
那津希がキレかかる。

「那津希、ヤバい。コメクサ来たよ」
莉奈が米久先生に気付いて那津希を止めた。
「チッ邪魔な奴…」
そう言い残して、2人は教室に入っていった。

始業のチャイムが鳴る。

――嫌だ、入りたくない。あんな人達が居る教室に入りたくない。
咲音が立ち尽くしていると、
「っと…咲音？早く教室入ろーよ」
「は…あ、うん」
咲夜は何事もなかったようにそう言って、教室へ入っていった。

――咲夜ちゃん…凄い子が転入してきたもんだ…。

咲音は唖然としながら教室に入るのだった…

＊＊＊

それから、那津希達は咲夜の行動や言葉に一々つっかかるようになった。
その度に咲夜は無視するか言葉で突き放している。
こんな日が続き、クラスに咲音以外で咲夜に話し掛ける人は居なくなってきた。

昼休みも…

「ねぇ、咲夜ちゃんも呼んでいい？」
皆でお弁当を食べるために机をくっつけていた時に、咲音が言った。
「えー、やめてよ。徳森さん達が来ちゃうじゃん」
「関わんないほうが良いって…絶対」
友達にそう言われてしまう。

そしてある日、咲夜はＳＨＲが終わるとすぐに教室を出てしまうので、咲音も急いで後を追った。
校門を出てからも、なんとなく話しにくく、咲音は咲夜から2，3ｍ離れて歩いていた。
すると、ふいに咲夜が立ち止まって振り返った。
「！」
「何？」
気付かれていたらしい。だがその声はあまり不快そうではなかった。
「あ、あの…駅同じだよね？一緒に帰ってもいいかな…？」
咲夜は少し黙っていたが、やがて顔を緩ませ微笑んだ。

「いいよ」

――微笑って　くれた…

「あ、ありがとう」

2人は並んで歩き始めた。

「咲音…やっぱお前、他の奴らとはなんか違うな」

「え？」

「良い奴だよ」

「そ、そうかな？」

「うん」

「あ、えーと…なんていうか、大丈夫？徳森さん達のこと…」

「あぁ…本当にしつこい奴らだけどな、私はあれくらいなんともない」

「…皆、徳森さんが怖くて…止められないの。ゴメン…」

「大丈夫だよ。気持ちは分かってるから…」

――優しいなぁ、咲夜ちゃん…

「ねぇ、咲夜ちゃんって…なんでうちの高校に来たの？」

「…聞きたいか？」

「あ　いや、話したくなかったら、良いんだけど…」

なんとく、聞いちゃいけないような、そんな気がした。

咲夜はクスッと笑った。

それからしばらく二人は他愛の無い会話をして、駅の改札口で別れた。

――咲夜ちゃんはあんなに優しい子なんだから、きっと皆と上手くやっていけるよ。
だから徳森さん達に、止めさせなきゃ…！

第2話　クラスの敵

ある日の昼休み、咲夜がまた那津希達に絡まれていた。

「ねぇ神名さん、数学の宿題やってたよね？写させてよ～」

「あたしもー」

「…他の奴に見せてもらえば良いだろ。いきなり馴れ馴れしくするな」

やはり咲夜は拒絶する。

「別に、写すだけだしー？」

「いーじゃんちょっとくらい」

カナが咲夜のノートを奪った。

「お前…」

咲夜は取り返そうとするが、背の高いカナにノートを高く掲げられると手が届かない。

ガタンッ

揉み合っているうちに、咲夜の足が不良男子生徒の机の脚に当たった。

「うわっ何すんだよてめぇ」

咲夜はその男子を一瞬だけ強く睨んだ。

気がつくと、カナ達がいつの間にか咲夜のノートにラクガキを始めている。

「きゃはは、ウケるッ」

「表紙にも書いちゃおーよ」

「うっぜーな、女のクセに」
男子生徒も悪態をつく。

「返せ！」

――止めなきゃ、止めなきゃ、止めなきゃ…
咲音はさっきからその様子を見ていた。
決めたの、私が止めなきゃいけないって…！

ダンッ！！

咲音は、勢い良く両手で机を叩いて立ち上がった。

一瞬、全ての音が消えた。
それから、少しずつ教室がざわつく。

「何、アリスちゃん」

口を開いたのは那津希。

「咲音…」

「もうやめてよ！！」

咲音は那津希達に向き直って言った。
「あーあーうるさいうるさい」
「お嬢様は良い子ぶりっ子ですか」
「な…
私はそんなんじゃない…！
どうして…どうしてそうやって転校生をからかったりするの？咲夜ちゃんが一体何をしたの？」
「何なの？口出してこないでよ」
「あんたみたいなお嬢はあたしら庶民とは格が違うんでしょ？」
皮肉を得意とする那津希が言った。
「違う！！…仮にそうだとしても…だからって、咲夜ちゃんを助けちゃいけないの！？」
「……」
女子達は口をつぐんだ。

「…もういいよ、咲音」
咲夜が静かに口を開く。
「咲夜ちゃん……」
「意味わかんないわ。呆れた」
一瞬黙っていた那津希が溜め息まじりに言った。
「こっちのセリフだ」
「はぁ？」
那津希は食い下がったが、咲夜は鼻でわざとらしく溜め息をつくと、席に座った。
「…カツク……」
那津希の怒りは膨らんでいく。

「咲音、あんた、スゴいよ」
すでにお弁当を食べていた友達が言う。
「そんなことないよ…」
咲音は苦笑する。
――これで、良かったのかな？
止められたけど、徳森さんをさらに怒らせちゃったような…
複雑な気持ちだった。

＊＊＊

その日の放課後。
「咲音」
「ん？」
咲夜に声を掛けられた。
「…ありがとう」
咲夜はすれ違いながら、そう言った。
「うん」
振り返り、咲音は笑顔で応えた。
「あ、今日――」
一緒に帰ろう　と、言おうとしたが、咲夜はすでに行ってしまった。
咲音と一緒に帰らなかったのは、少し懸念していたことがあったからだ。

咲夜が、昇降口で靴を取ろうとした時…

「神名さん」

振り返ると、あの6人組の1人、神崎茜が立っていた。

「…何？」

「先生が呼んでるよ。職員室まで連れてってあげる」

「……」

咲夜は違和感を感じたが、一応ついて行くことにした。

茜が向かった先。やはり職員室ではなかった。

「おい。ここ視聴覚室だろ？」

咲夜が言うと、茜はクスクスっと笑った。

「いいから、」

言いながらドアを開ける茜。

「入ってよっ」

「っ…」

茜はドンッと咲夜の背中を叩き、教室の中に押し入れた。

「いらっしゃ～い」

薄暗い部屋に、やけに明るい声が響いた。

声の主は、那津希。周りを見渡すと、茜以外の5人組。茜も中に入って、5人に加わった。各々、机の上に座ったり壁に寄りかかったりしてこちらを見ている。

まるで愚か者を嘲笑うかのような目で。

――予想が当たったか…

咲音と一緒に帰らなくて良かった。咲夜はそう思った。

「何のつもりだ」

とりあえず口を聞いてやる。

「あんた、マジでムカつく女だからさー…お仕置きしてあげようと思って」

そして那津希はニヤリと笑った。

「でもね、許してあげないこともないよ…ここで謝ればね」

咲夜はフッと笑った。

「私が謝ると思ってんのか？」

「さぁね…無理矢理にでもやらせるけど」

冷酷な笑みを零す那津希。無理矢理にでもやらされるつもりも無かったが。

「ほら、さっさと土下座しなさいよ。ごめんなさいって」

かなり嫌みな顔で言う那津希に、咲夜は怒りを覚えた。何が何でもしてやらないと思った。

咲夜が全く動かずにいると、那津希の隣に居た莉奈が、

「何ボーっとしてんのよ。自分の立場、わかってんのかっつの！！」

咲夜の肩に掴みかかり、強引に座らせようとした。

――クソ…

ドスッ！！

教室に、鈍い音が響いた。

「うっ…」

咲夜の右膝が、莉奈の腹に直撃したのだ。
続けて、咲夜は痛みに腹を抑えた莉奈の首の後ろを右手を払って殴り、莉奈は床に倒れ込んだ。
悶える莉奈を見ながら、5人の顔色が一気に青色に染まった。
全員が言葉を失い、一瞬の沈黙が訪れた。

「…なっ、何すんの、あんた…」

那津希が目を見開いたまま言葉を拾う。その姿を咲夜は冷酷に見つめた。

「お前らも、やられたくなかったらここから出てけ」

その言葉は、棘のように思えた。表には出さないものの、皆がこの転校生に恐怖を感じた。
だが、ここで引き下がっては那津希のプライドが廃る。
「やられる？あんた、まだ自分の状況を理解してないんだね！！」
那津希が咲夜に飛びかかり、ガシッと首を絞めた。どうしても両手両膝を床につかせるつもりらしい。
「カナ！！茜！！」
「おうっ」
ボスが仲間を呼び、咲夜の体は拘束され……る前に、咲夜は右肘で那津希の腹を突き、腕を掴もうとしてきたカナを殴り茜を蹴り、一瞬で3人を倒してしまった。
それはもう凄まじい、反射神経瞬発力、そして体力だ。

床や壁に打ち付けられた彼女達は動くことが出来ず、莉奈も未だ立ち上がれなかった。
喧騒に参加していなかった二人も声を失ってその場に固まっていた。
咲夜は中央に君臨していた。

＊＊＊

咲夜が茜に呼ばれた、少し後――

「あ、有栖川。神名を知らないか？」
咲音は、彼女らの担任、一部通称コメクサこと米久先生にそう言われた。
皮肉にも、本当に先生は咲夜に用があったらしい。もちろん那津希らは咲夜を呼び出すために口実を使ったのだが。

「咲夜ちゃん…ですか？もう帰っちゃったと思うんですが…」
「探して来てくれないか？至急なんだ」
至急も何ももう居ないんだって…
咲音はそう言いたかったが、なんとかこらえた。
「わかりました、探して来ますね」
断っても良かったのかもしれないが、人の良い咲音は引き受けた。
靴があるか確認して、無かったら間に合いませんでしたって言おう。
どうせ無いだろうと思って咲夜の下駄箱を覗く。

「あれ…」
意に反して、そこには咲夜の黒いローファーが堂々と置いてあった。

まだ帰ってなかったんだ。
――しょうがない。
引き受けた手前、探すしかなかった。
とりあえず教室に行く。居ない。
トイレ。人気なし。

うーん……

まだこれっぽっちも探していないのに、咲音は頭を捻る。移動教室以外ほとんど教室に居る咲夜の行く当てなど、他に想像出来なかった。
片っ端から探すしかないか。
そう思い決めて、２年Ｃ組の教室がある３階から順に教室を回って下っていくことにした。
３階は東校舎には２年全８クラスの教室が並んでおり、渡り廊下を渡った西校舎は特別校舎棟となっている。１階から５階まで、特別校舎棟は音楽室や美術室、準備室などの類で埋まっている。

３階を全て回り終えたが、咲夜の姿は無かった。もし移動していたら元も子もないな。そう思ったがどうしようもない。
階段を下り、２階へと到着した。ここは３年生の教室が並んでいる。まさか３年の教室には居ないだろうと思い、特別校舎棟から回ることにした。
渡り廊下の窓からは、夕日が差し込んでいる。もうじき日が暮れるだろう。
廊下を渡り終え、角を曲がろうとした、その時だった。

ガタンッ！

何かが壁にぶつかるような、あるいは何かが倒れるような派手な音が、奥から聞こえた。
咲音は一瞬ビクッとして立ち止まる。

――…何の、音？

次の瞬間、さっきと同じような音が、今度は立て続けに聞こえた。
これはただ事ではない。
咲音は少し迷ったが、音が聞こえてくる教室へと足を踏み出した。

それは、視聴覚室だった。
近づいていくと何か声が聞こえてきた。何を言っているかはよくわからない。

何度も葛藤した末、意を決して扉を開けた。

ガラ…

「――！！！」

咲音の目の前に、とんでもない景色が飛び込んできた。

「あ、あ、あの…」

もはや呂律が回らない。目の前の状況処理に、頭が追いつかなかっ

た。
４人の女子が痛みを堪えながら倒れている。教室の隅には、怯えて固まっている女子が２人。
そして、その中心に佇んでいるのは――咲夜。
「咲音…」
まだ混乱が解けていない咲音の耳に、咲夜の声が入り込んだ。
それとほぼ同時に、
「有栖川～？」
という、米久先生の間延びした声が外から響いた。
――まずい！！
咲音はとっさにそれだけ判断した。近づいてくる足音が、咲音を直感的に動かす。
「咲夜ちゃん！！」
咲音は瞬時に咲夜の腕を掴んで、教室の外へ引っ張り出した。
「っちょ…」
ピシッ！！
戸惑う咲夜をよそに、勢い良く扉を閉めた。

おー神名、こんなところにいたのか。そう言う先生の声が聞こえた。先生が咲夜に何の用があったのかは知らないが、とにかくこれで咲音の役目は終わった。
そして、気付いた。

あ。
まずい、勢いで自分まで中に入ってしまった。背中に視線を感じる。

「……」
咲音はゆっくりと振り返った。
「何やってんのよ、アリスちゃん」
那津希の言葉に、思わずビクッとしてしまった。

「あんたが何でいきなりここに来たか知らないけど…」
言いながら那津希は静かに立ち上がった。咲音も何で自分がここに入ってしまったか知らないのだ。
「昼休みのこと、覚えてるよね？」
「……」
やっぱり…昼休みのこと恨んでるよね。恨んでますよね。恨みますよね。
咲音の体は固まったまま、顔だけが蒼白を帯びた。
咲音が口を開かずにいると、また那津希が話し出した。
「…やっぱりね。あんた、本当はあたしらに逆らえないんじゃない」
う。
この言葉にはグサッと来る。反論が出来ない。
皆が近づいて来て、咲音は取り囲まれる形になった。
「ただ皆の前で良い子ぶってただけじゃねーの？」
カナも咲音を罵倒した。
「弱い弱いにんげ～ん♪」
茜が歌うように言う。かすかに笑いも含まれていた。

「咲夜ちゃんを助けたいって？そんな生ぬるいこと言ってる奴が、強い訳ないじゃない」
那津希の一言に、咲音は完全に下を向いてしまった。歯を食いしばる。言い返せない自分が悔しい。
――さっきはあんなに勇気出たのに…何で……
「とりあえずあんた、超ムカつくからさぁ、覚悟しときんな」
そい言い残して、那津希らは視聴覚室を出ていった。
咲音は一人、教室に取り残された。

＊＊＊

咲夜が米久先生との話を終えて視聴覚室に戻る途中、不運なことに那津希達とすれ違った。
咲夜は睨み付けていたが、那津希はすれ違い様にふっと笑って言った。

「覚えてろよ」

復讐の、合図だった。

「か…は……」
咲夜が視聴覚室に戻ると、咲音がふらふらと教室から出てきた。何やら危ない雰囲気だ。咲音は咲夜を見ると、その場に座り込んだ。

「大丈夫か？咲音」
慌てて駆け寄る。
「咲夜ちゃん…私……」
泣いてはいなかったものの、精神的にかなり参っているようだ。
「あいつらに何か言われたのか？」
「うん…もうボロボロだよ」
咲音は苦笑した。
「あたしらに逆らえない弱い弱い人間だとか、生ぬるいこと言ってる奴が強い訳ないとか…
私、もう自信無くなっちゃった…」
「……」

咲夜は、ゆっくりと咲音の肩に手をおいた。咲夜のぬくもりに触れ、なんとなく心が落ち着いてきた気がした。

「咲音。お前は、強いよ」

――そんなこと、ないんだよ。本当に……

咲音は微かに首を横に振った。

「ごめんね、私余計なことしちゃったみたいで…そのせいで、咲夜ちゃん…」

そこで咲音はハッとする。

「あ、咲夜ちゃん大丈夫だったの？さっき凄い音がして…それで行ってみたんだけど」

「あぁ…私は大丈夫だ」

「何があったの…？」

「…無理矢理土下座させられそうになったから…やっつけた」

――は？

咲音の動きと思考回路が停止してしまった。

“ヤッツケタ”？

とりあえずの処理事項は、「久しぶりに聞いた言葉だな」。

「な、殴った、の？」

止まっていた口を動かす。何をすればあんな凄い音が鳴るんだ。

「まぁな」

咲夜は普通に肯定した。咲音は唖然とするばかりである。

「すごいなー…私には出来ないや…」

「ごめん。引くよな、暴力ふるう人間なんて」

咲夜は少し苦笑して言った。どこか寂しげな雰囲気を纏っている。
「そんな――」
「1つだけ言う。私があいつらに呼ばれたのは、お前のせいじゃない」
そう言うと、咲夜は立ち上がって歩き出した。
――待って…
私、咲夜ちゃんに近付きたくないなんて思わないよ…！
だから、待って…！！

「咲夜ちゃん！私、引いたりしてないから！！」
咲音の声に、咲夜は歩を止めて振り返った。
「凄いなって思ってる…
咲夜ちゃん、あんな席なのにへこたれなくて…徳森さん達に何言われても、言い返したり、今だってやっつけちゃうし…
本当、尊敬してる」
「咲音…」

「咲夜ちゃんは、強いから…私なんか、何やってもムダかもしれない、けどそれでも、咲夜ちゃんの助けになりたいって、思ってるんだよ。だから、1人で背負おうとしないで…」
きっとムダじゃないって、信じたいから…
あなたに、笑ってほしいから。
咲音が立ち上がるにつれて、意志も比例するように強くなる。

「私なんか頼りにならないかもしれないけど…何かあったら、いつでも言ってね」
「…私、なんか……」
「良いの」
咲音は優しく微笑んだ。
「当たり前だよ。友達なんだから」
「！……」
――巻き込んで、しまった。自分のせいで。咲音は那津希達に確実に目をつけられた。その理由は、紛れもなく、自分を助けたせいだ。だから、自分から遠ざかろうとした。もう関わらなければ、咲音を傷つけることは無いと。でも、彼女は…
「ごめん、ありがと…」
咲夜は、謝罪と感謝の言葉を並べた。咲音はニコッと笑った。
＊＊＊
カチッ
少女の目の前には、一台のノートパソコンがあった。今開いたホームページは、「紅城高校裏サイト」。
少女は、そこの掲示板に書き込みを始めた。

『受刑者
2年C組　神名咲夜
有栖川咲音
罪内容
暴力行為及び他生徒への侮辱

よって、この2名をクラスに危害を加えるものと見なし、排斥することを請求する。
逆らう者や、受刑者に荷担するものは、同罪と見なす。

以上　制裁者』

そして、書き込みボタンを押した。

第3話　級長登場

次の日、朝の2年C組は騒然としていた。

「ねぇ、見た？裏サイト」
「見た見た、ついにって感じだよねー…」
「何！？誰が書いたの？」
「徳森さんに決まってんでしょ。あー怖い怖い」
「あー…そりゃ逆らえないな。可哀想だけど…」

女子達の声に混ざって、男子も会話を始める。

「そーいや徳森ってうちの級長になったんだっけな」
「そうそう。ついに裏のトップが動き出したな」
中にはワクワクした表情を見せる者もいた。

「咲音ー…大丈夫？」
亜弥加は教室の隅で沈みまくっている咲音に声をかけた。咲夜はまだ来ていない。
咲音は裏サイトに干渉することが無く、先ほど学校に来て初めて知った。

――裁きだ。自分と咲夜が、ターゲットにされた。

「私…なんか悪いことしたかなぁ…」
今にも泣きそうな声で言う。
「咲音は悪くないって。那津希が勝手にキレただけなんだから」

「うん……」

サイトを見ていなかった生徒にも凄い速さで伝わり、咲音に挨拶をする生徒さえ居ない。
だが、亜弥加だけは側に来て慰めてくれた。

「亜弥加…私の近くにいたら、亜弥加まで…」
「バカ、何言ってんの。あたしはそんなこと気にしないよ」
亜弥加の優しさが身に沁みる。

はぁ……
盛大な溜め息が零れた。

――級長は、1クラスに1人ずつおり、学年で8人いる。
所謂クラスの「裏のトップ」というべき存在だ。
「級長」とは言っているが、実は2年にしかおらず、前年度の級長が話し合って次の級長を決めるのだ。
基準は、クラスで絶対的な力を持つ存在――誰も逆らうことが出来ない人物。

級長には様々な権利が認められている。
代表的なのは、「掲示板で制裁者を名乗る権利」で、掲示板に書き込まれた内容にはクラスメート全員が従わなくてはならない。
もちろん無関心な生徒も居るが、逆らうことはしない。級長全員を敵に回すことになるからだ。

そして、新しく2年C組の級長になった徳森那津希は、「制裁者」として咲音と咲夜の名を書き込んだのだ。

宣戦布告――復讐の始まりだった。

チャイムが鳴り、咲夜が来た。同時に教室の空気がさわっと動く。皆がチラチラと咲夜に視線を送る中を全く気にする様子もなく歩いた。

「神名さん」

咲夜が席に着くと、那津希がすかさず話しかける。何かふっかける気だ。咲夜はシカトしていた。

「粋がってられんのも今のうちよ。あんたなんかすぐに、皆の嫌われ者になるんだから」

「……」

何のリアクションも見せずに、鞄を教科書をしまう咲夜。

咲音の心は、ズキッと痛んだ。

私のせいだ…私が余計なことしたから。助けになんて全然なってない。むしろ状況を悪化させただけ…

「……っ」

自分の無力さに、失望した。

那津希は鼻で笑うと、自分の席に戻った。

＊＊＊

そして、昼休み――

皆の目を避け、咲音は咲夜を誘って亜弥加も一緒にテラスで弁当を食べることにした。人は少し居たが、隅の方に座った。

「はぁ……」

一日中、溜め息ばかりの咲音だった。

「……」

咲夜は今日、ほとんど口を開いていない。

「咲音、咲夜ちゃんも、元気出しなよ…って、出ないよね…」

「話し掛けてくれるの、もう亜弥加だけみたい」

「そんな消極的になってないでさ、まだ始まったばっかだよ？何とかなるよ、絶対！」

「亜弥加…さっきはあぁ言ってたけど、やっぱり関わらないほうがいいよ。徳森さんは級長なんだし…」

「…咲音」

「？」

「あたしは…その級長っていう制度、元々反対だった。ずっと、なくなれば良いのにって、思ってた。面白がってる人もたくさん居るけど…でもあたしは、絶対ダメだと思う」

「うん」

「だから、もうこーなったらさ、級長潰しちゃうくらいの勢いで反抗しようよ！」

「えぇ？」

級長を潰す…普通なら有り得ない考えだ。

「…あぁ、それには私も賛成だ」

「咲夜ちゃん！」

ずっと黙っていた咲夜が同意した。

「よし、じゃ決まりね！」

亜弥加がグーという仕草をする。

「ちょちょちょ待ってよ！」

咲音は慌てて止めに入った。普通に言っているがこれはとんでもないことだ。

「君達級長サン達の怖さを知らないね！？あの人達を敵に回したら――」

「回したら？」

「！！！」

心臓がドクンと跳ねた。

いつの間にか、一人の男子生徒が目の前に立っていた。金髪の短い髪を立たせ、抜群のルックスに強い瞳を持った男。

その人物は……

「2年A組級長、天馬（テンマ）　戒（カイ）……」

テラスに、一陣の風か吹き捲いた。

「あれ、俺の名前知ってたんだ。嬉しいねェ」

咲音でも知っていた。彼は2年の間では有名なのだ。――つまり、危険人物。

「那津希チャンがなんか言ってたからさ、どんな奴か気になって探してたんだよ。こんな隅っこで昼食かァ、寂しいねェ…」

「何の用だよ」

咲夜は天馬を睨みつけて言った。

「君、転入生だよね？会えるの楽しみにしてたよ」

「？」

天馬は不気味に笑った。

「それにしても、転校早々那津希チャン達と争うなんて、運が無いね。…そういや、受刑者は二人だけって聞いたんだけど？」

亜弥加は少し冷や汗をかいた。

「ま、どーでもいいか。――で、さっきの『級長を潰す』っていうのは？」

「……」

「そのままだよ。その訳分かんねー制度ごとお前らをぶっ潰すっつってんだ」

黙ってしまった咲音と亜弥加に代わり、咲夜ははっきりそう言った。

「へぇ…面白いね、君」

天馬は口の端を吊り上げて笑う。

「咲夜ちゃん…」

「…じゃあ、級長を敵に回すってのがどういうことか、教えてやんねーとな…」

「！待って！！」

咲音が止めるも、天馬は咲夜に近づいていく。咲夜は弁当を地面に置くと、立ち上がって身構えた。

天馬の右ストレートが、咲夜の顔面に放たれた…。

女子の顔を殴るなんて、なんて最低な男だ。私だったら絶対に治療費と慰謝料を請求する！

と、目をギュッと瞑った咲音は一瞬の間に考えていた。

「…何のマネだ」

「え…？」

見ると、天馬の拳は咲夜の顔面スレスレでピタリと止まっていた。

「なーんてね」

天馬は右手を下ろすとヘラと笑う。

「俺が直接手を下す必要もねェよな。どーせ那津希チャンが暴走しただけだろ？それに、君達面白いから、何すんのか見てみたいし」

はぁ…？という顔で咲夜は天馬を眺める。

「ま、他の級長も俺には手ェ出せねーしな。楽しませてもらうよ」

「…お前、ふざけてんのか？」
「ククッ、さーね。…つか、俺のストレートに微動だにしなかったの君が初めてだよ。一応誉めとく」
そう言い残すと、天馬は校舎へと入っていった。
テラスに居た人達もいつの間にか居なくなっていた。おそらく天馬が絡み始めた時に逃げたのだろう。

「…咲夜ちゃん、大丈夫…？」
咲音は心配そうに咲夜の顔を覗き込んだ。
「あぁ、あいつが本気で殴ろうとしてなかったの、分かってたから…」
「え、分かってたの！？」

――天馬　戒…
あいつは一体何者なんだ…？

第４話　夕空ノ後ノ月

昼休みが終わり教室に戻ると、クラスの雰囲気が午前中よりもさらに悪化した。
咲夜は軽く舌打ちを漏らす。
「あいつら…バラ巻きやがったな」
「え？」
こそこそと、クラスメートの話し声が聞こえてきた。

「肩掴まれただけで殴ったんだって。めっちゃ怖くない？」
「ほんとに女子…？有り得ないんだけど」
「あのお嬢アリスも、皆の前で良い子ぶってただけなんだって。本当は逆らえないんじゃんねぇ…」
酷い言われようだ。しかし、反論出来ないように上手く話を振り撒いている。

「…うるっさいな」

そこで口を開いたのは、亜弥加だった。
「あたし、そうやって影でネチネチ言うの、嫌いだよ。しかも全部聞こえてんのよ」
「そりゃあ…」
「聞こえるように言ってんだし」
女子達はクスクスッと笑った。
「……っ…」
そこで、先生が入って来た。

先ほどの生徒達は、つい最近まで亜弥加の友人だった。周りと打ち解けるのが得意な亜弥加は、新学期が始まってすぐに新しい友達がたくさん出来ていた。
でも…
自分のせいで亜弥加まで巻き込んでしまったことが、咲音は辛くてどうしようもなかった。

夜、咲音は枕を抱えてベッドに座り込む。
「……」
今の状況じゃ、きっと何を言い返しても無駄…
咲音は、この最悪な展開を打破する策を見いだせなかった。

あの人達が全部悪いって思ってたけど、本当は違うのかな…。やっぱり、暴力はダメ、かな…。自分の身を守るためでも？でも、何があっても暴力はふるっちゃダメだって教わった気がする…うーん…。…私も、あの状況じゃああ言われてもしょうがない、か…。教室では止めたくせに、6人に囲まれたら何にも言えないんだもんね。情けないな…。

咲音は一人、苦笑した。考えれば考える程、自分に自信を持てなくなってしまう。
このまま良い子ぶりっ子と言われ続けて、皆に嫌われていくしかないのか…

いつの間にか、頬を涙が伝っていた。

自分の無力さに対する失望、どうしようもない絶望、亜弥加への罪悪感…
全てが咲音を取り巻き、底へ底へと引きずり込んでいくように。

でも、咲音は闇に飲み込まれたくなかった。もがきたかった。ただ、その方法が見つからなかったのだ。

その時、一つの答えが浮かんだ。

＊＊＊

「謝ろうよ！！」

「「は？」」

昼休み、昨日と同じように三人はテラスの隅に座り、弁当を食べていた。

咲夜と亜弥加は唖然として次の言葉を待つ。

「ほら、咲夜ちゃんは徳森さん達に暴力ふるったこと、私は皆の前ででしゃばったことを謝るの！」

「「却下」」

ガーン。

「で、でもちゃんと謝れば徳森さんも分かってくれるんじゃ…」

「謝ったって下に敷かれるだけだ。さらにバカにされるぞ。逆効果だ」

「そーだよ！悪いのは那津希達なんだから」

二人揃って猛反対だ。

「でもさ、徳森さん達は咲夜ちゃんのノートに落書きしたり、謝らせようとしただけだし――」

「あんた那津希に味方する気？」
亜弥加が少しムッとして言う。
「いや、そういう訳じゃ無いけど…」
やっぱりダメ、かな…。やっと導き出した答えだったのに。
「じゃあ、どうすれば良いの？」
咲音は亜弥加に聞き返す。
「うーん…こっちも少しは間違いを認めても良いけど、あっちにも間違いを認めさせないのよ」
「どうやって？」
「そーね…『あんたは級長の権利を乱用してる』って言っても、上手く言い訳されそうだし…」
「だったら級長の権利を奪うしかねーだろ」
咲夜が口を挟んだ。
――そ、そう来ますか…
「権利を奪うか…良いねそれ！でもどうやんの？」
亜弥加がノった。
「簡単だ。級長ってのは、誰も逆らうことが出来ない奴がなるんだろ？だったら、皆が徳森に逆らえばいいんだ。立場を逆転させるんだ」
「確かに、そうすれば級長じゃいられなくなるだろうけど…」
亜弥加が溜め息をつく。
「問題は、どうやって皆を味方につけるか、だよね…」
今、クラスメートに咲音達と那津希達、どちら側につくかと聞いた

ら、迷わず全員那津希と答えるだろう。咲音達に味方して級長を敵に回そうとする生徒など居ない。

「…話してみなきゃ始まんないよ。皆、徳森さんの前だと私達に近付けないだけかもしれないし…
私、話　してくる！」
咲音は立ち上がった。
「待って咲音！行かないほうが良い…」
亜弥加が止める。
「どうして？」
「…皆、もう……」
「？」
亜弥加の言葉はそれ以上続かなかった。

「行っても、後悔するだけだぞ…」

代わりに咲夜がそう言った。
「期待しなければ…これ以上傷つくことも無い」
咲夜は意味深に呟いた。

「え…？」

亜弥加が「行かないで」と咲音のほうを見る。
――どういうこと？
…でも！

咲音はテラスをあとにした。
「咲音…」
亜弥加も立ち上がろうとした。
「行くな」
咲夜がそれを止める。
「お前が行けば…多分、面倒なことになる」
「……」
――咲音……

＊＊＊

咲音が教室に現れると、クラスメート達が一気によそよそしくなる。
最近はいつもそうだった。
那津希達も居たので、咲音は教室から出て、女子達がトイレに行くタイミングを見計らっていた。

「あ…」
女子達が数人、教室から出て、トイレの方向へ向かって来た。
「あの　さ、皆…」
彼女らは怪訝そうに顔を見合わせる。
「徳森さんのことなんだけど…私、皆が徳森さんに従わなくなったら、徳森さんも級長じゃいられなくなると思うんだけど…どうかな？」
女子の一人が首を傾げる。
「どうって何。…あんたさぁ、なんか勘違いしてない？」

「！？」

「確かに那津希は嫌ーな子だけどさ、実際あたし達に被害は無いし。別に不満がある訳でもないのよ」

「……」

「そーそ。有栖川さんが何考えてんのか知らないけど、徳森さんには絶対逆らえないよ」

「有栖川さん達を助けるために何であたしらが那津希に逆らわなきゃいけない訳？」

「そんなことしたくないよね～」

女子達は次々と咲音の期待を裏切っていく。そして…

「てかさぁ、有栖川さんも馴れ馴れしくあたしらに話し掛けてくんのやめてよ。

もう友達じゃないんだからさ」

！！……

ひどいよそれーとか、だってなんかウザいしとか言いながら、女子達は笑いながらトイレに入っていった。

咲音は一人立ち尽くしていたが、女子達がトイレから出て来るのを恐れてその場を離れた。

教室に戻る気にはなれなかった。

――『期待しなければ…これ以上傷つくことも無い』

その時初めて、咲夜の言葉の意味がわかった。

＊＊＊

亜弥加が咲音と一緒に行けば亜弥加は必ず言い返し、さらに面倒なことになる…
と考えて行かせなかったが、既に面倒は起こっていた、と咲夜は気付いた。
５時間目も終わり、６時間目が始まっても、咲音は教室に戻ってこなかった。

「咲夜ちゃん、咲音探しに行こうよ」
「…そうだな」
ＳＨＲを抜け出し、亜弥加と咲夜は咲音を探しに行った。

「どこに居ると思う？」
「……」
――人の少ない所といえば…テラスだろう。
「こっちだ」
二人は階段を駆け上がった。

「咲音！！」

咲夜の予想通り、咲音はテラスに居た。こちらに背を向けて座り、一人風に吹かれていた。端ギリギリなので、かなり危ない。

亜弥加に呼ばれても、咲音は振り向かなかった。
俯く彼女に、二人はゆっくり近付く。
「亜弥加っ！咲夜ちゃんも！どうしたの？」
「…へ？」
いきなり振り向いた咲音の表情は、とびきりの笑顔だった。
「な、泣いてるかと思ったのに…」
亜弥加は呆けながら呟く。
「ん？何で？」
「何で戻ってこなかったんだよ」
咲夜が言った。
「あぁ…はは、ちょっと疲れちゃって…サボっちゃった」
咲音はクスッと笑うと、立ち上がった。
「クラスの子には話したの…？」
「…うん」
背を向けて歩き出す。
「やっぱり無理だったよ。でも、しょうがないよね…」
なおも笑いながら話す咲音。すると、ふいに立ち止まった。
「もう友達じゃないんだもん、ね…」
言葉の最後は、声が震えていた。
「ごめん…ごめんね、咲夜ちゃん」
咲音は、後ろを向いたまま謝った。
「！」

「私…私が泣いちゃったら、咲夜ちゃんが傷つくと思ったから…自分のせいで、私が傷ついてるって、思ってほしくなかったから…」
しゃくりあげながら、言葉を紡ぐ。

「これ以上私が悲しまないようにって、離れていってほしくなかったから…」

「咲音…」

「何があっても、咲夜ちゃんの前で落ち込んだり、泣いたりしないって、思ってたのに…っ」
堪えようともがいても、止まらない涙。
咲夜は一歩踏み出した。
「咲音」
咲音は涙を見せることはしまいと、振り返ることをしない。
「ごめん…本当に、ごめんな。私のせいで、こんな苦しい思いをさせて…」
咲夜の言葉に、ギュッと目を瞑る。
――あなたのせいじゃないの…

「でも、もうお前から遠ざかることはしない」
「！…」
「一緒に、居てほしい。

…私も、咲音に離れていってほしくないから…」

「咲夜…ちゃん…」
咲音は驚きと嬉しさの入り交じった表情で振り返った。
「だから、今は…
思いっ切り、泣いていいんだ」

咲音が目を見開くと同時に、さらに涙が溢れ出した。
「…うっ…うぅ……っ…」
咲音の啜り泣く声が、テラスに響いた。

＊＊＊

「咲夜ちゃんに全部持ってかれちゃったなぁ、あたしが慰めるつもりだったのに」
咲音が大分落ち着きを取り戻した時、亜弥加が冗談めかしてそう言った。
「亜弥加…ありがと」
亜弥加はふっと笑うと、咲音の正面に向き直った。

「咲音は一人じゃないよ。あたしも咲夜ちゃんもついてる。今はまだまだ弱いかもしれないけど、絶対に良い方向に向かってく。あんたが諦めさえしなきゃね」
「……」
「あたしは、他の誰が何と言おうと、咲音から離れたりしない。当たり前よ。そのうち皆だって味方になってくれるから」
「…うん！」
咲音はにっこり笑うと、暗くなりかけている空を眺めた。

この先、もっと辛いこととか、悲しいこととか、色んなことが待ち受けていると思う…

でも、私達はきっと、諦めない。だから、乗り越えていける。
今はまだ、太陽はきっと私達を照らしてはくれない。
でも、いつか必ず近付ける時が来る。
月が見ていてくれるから…。

第5話　”正しいこと”

それからの日々は、端から見れば本当に散々だった。
クラスメート達は少しは咲夜が怖いのか、ほとんど咲夜には近付こうとせず、逆に咲音が集中的にイジメに遭っていた。
その代わり、咲夜は那津希達に毎日のように絡まれていた。
ただ、二人は全く凹む様子を見せなかった。全く気にする素振りを見せなかった。
咲音はどんな扱いを受けようと、クラスメートを恨むことをしなかった。
咲夜は反抗すれば相手の思う壺だと考え、徹底的にシカトを決め込んだ。

いつか、何かが変わることを信じて――…

＊＊＊

ある日の放課後、咲音が職員室に書類を運んでいる時だった。
咲音が階段を降りて踊場を曲がった瞬間、
「うわっ」
いきなり衝突され、書類が散らばってしまった。
咲音にぶつかって来たのは、イジメの張本人。那津希の他に、数人の女子がいる。
――またこの人達か…

咲音はそう思いながら、無視して書類を拾い始めた。だが…

「ちょっと、何　人にぶつかっといて無視してんの？」

那津希にそう言われても、黙って拾い続けた。

勝手に言わせておけばいい。咲音は言い返す気も失せていた。

「シカトしてんじゃねーよっ！！」

那津希がしゃがんでいる咲音を蹴ろうとした。その時。

「…もう止めなよっ！」

「！？」

全員の動きが止まる。

声を出したのは、那津希の後ろに居た女子の1人。

そして、なんとあの6人組のメンバーである、園原実姫（ソノハラ ミキ）だった。

信じられなかった。まさかあの6人組の中に、咲音の味方をする者がいるとは。

咲音はもちろん感謝する気持ちもあったが、驚きのほうが圧倒的に大きく、言葉も発せずにただ黙って実姫を見ていた。

「…実姫、今なんつった？」

那津希も信じられないらしい。

「……もう、やめろって言ったの…」

「あんた、それどういうこと――」

「あたし、最初から有栖川さん達をイジメるつもりなんてなかった

んだよ！！」
実姫が那津希の言葉を遮る。さすがあの６人組の中に居ただけあって、勇気はあるらしい。

「神名さんを呼び出した時だって、あたしは行きたくなかった！」
那津希は静かに実姫を見つめている。
「有栖川さんの言った通りだよ！転入生を皆でイジメて…バカだよ、あたしら。今だって、こんなことして何になんの！？あたし、もう那津希には着いていけない」
「…あたしに、逆らうってこと…？」
那津希は実姫を見つめたまま強い眼差しで聞いた。

もう少し精神の弱い人ならすぐに俯いてしまっていただろう。
だが、目を逸らしたら負けだ。実姫は真っ直ぐに見つめ返した。

咲音は黙って成り行きを見守るしか出来なかった。他の女子達も黙って見ている。
そして、実姫がゆっくりと口を開き、

「そう」

ハッキリと答えた。

しばらくの重い重い沈黙の後、那津希が少し笑って言った。

「『こんなことして何になんの？』か…わかったよ。こいつは見逃してあげる。でも……
あたしを敵に回すってことがどういうことか、わかってもらわなきゃ困るんだよねー…」

さすがの実姫も、睨み返すことが出来なかった。

急展開だった。

咲音は助かったかもしれない…でも、そんなことで安心は出来なかった。

今まさに、新たなイジメが始まろうとしていた。

――ダメ……

今、園原さんは私を助けてくれたんだ…私も、助けてあげなきゃ…！！

「調子乗んなよ……」

那津希が実姫の耳元でそう囁いて、去っていった。

女子達も慌てて後を追った。

踊場には、咲音と実姫の2人が残された。

実姫は黙って下を向いている。

「あ、あの…っ」

先に口を開いたのは咲音だ。

「助けてくれて…ありがとう…」

「ううん…」

実姫は少し微笑んだ。

「私、凄く嬉しかったから…私も、園原さんのこと助けるから！」
「有栖川さん…」
「…ごめんね、私のせいで…」
「待って」
「？」
「悪いのはあたしのほうだから…それに、あんたはもう関わらないほうがいいよ」
「え……？」
「あたしは自分でなんとかするから…じゃないと、助けた意味が無いでしょ」
そう言って、実姫は階段を降りかけた。

「待って！…私じゃ頼りないかもしれないけど…咲夜ちゃんにだけでも、話してみてよ！」
実姫は足を止め、少し振り返った。
「あの子なら、絶対園原さんを助けてくれるから！ね？」
「…でも、神名さんはきっと、あたしのこと嫌いでしょ…？」
「そんなことないよ！咲夜ちゃんは群れる人とイジメが大嫌いだけど…園原さんは1人で、あたしを助けてくれたんだから…徳森さんに刃向かってくれたんだから…咲夜ちゃんは絶対に、貴女を助けてくれる」
「……わかった、ありがとう…」
本当に、わかってくれただろうか…

実姫はもう一度振り向いた。
「…ねぇ、ひとつだけ聞いてもいい？」
「何……？」

「あたし、何か間違ったことしたかな…？」

その言葉に、咲音の心は痛んだ。

――私も、同じこと考えたよ…でも、今は間違ってなかったって思える…

咲音はゆっくりと首を振った。

「間違ってなんかないよ。悪いのは、徳森さんなんだから…
そう、徳森さんが間違ってるんだよ…どうして正しいことをした人が責められなきゃいけないの？絶対におかしい…」
「……」
「ねぇ、一緒に頑張ろうよ？変えてかなきゃいけないよ…あたし達が」

――本当に正しいことを、正しいと言えるように…

「間違いを、直さなきゃいけない」

咲音は自分の想いを言葉にした。
これほどに強い意志を持ったことは、今まで無かったかもしれない。

「変えられる…かな…？」
実姫はまだ、不安だった。でも、咲音と咲夜と一緒なら、頑張れるかもしれない…そう思い始めていた。
「大丈夫だよ…だから、1人で頑張らなくていいよ…」
咲音は優しく微笑んだ。
咲音の優しさに、実姫は涙が出そうになった。
「あり…がとっ」
涙をこらえ、そう言い残すと実姫は階段を駆け降りていった。

「さて…と」

咲音は書類を拾い終え、階段を降りて職員室まで運んだ。

1人で、夕焼けを眺めながら帰り道を歩く。
なんとなく、心が晴れたような気がする。
いや、まだ安心できる訳ではないが…
とにかく、実姫が自分の立場を顧みずに咲音を助けてくれたことが、本当に嬉しかったのだ。
これからは、咲音と咲夜と亜弥加、そして実姫の4人でこの理不尽な現状を変えられる。そう信じていた。

――本当に正しいことを、正しいと言えるように。

それが自分の使命なのだと、咲音は心に決めた。

実姫は、完全に那津希の敵にされていた。
イジメは実姫に集中し、咲音へのイジメはほとんどなくなった。
那津希に無視されるのは当然のことだが。

那津希が実姫に暴言を吐くのを聞く度に、咲音の心は痛んだ。
――ごめんね、私のせいで……

「咲夜ちゃんっ！！」
「何…？」
咲音は6人組の1人だったはずの実姫が自分を助けてくれたことを咲夜に話した。

「私へのイジメはなくなってきたけど…、今度は園原さんがイジメられてるんだよ！」
「……それで？」
「一緒に、助けてあげよう…？ごめん、勝手だけど、園原さんに咲夜ちゃんに話してみたら？って言っちゃったし…」
咲夜は一瞬眉をしかめた。

「園原がイジメられてんのは…あいつらの事情だろ？私には関係ない。それに、あいつも徳森達と群れてた…気弱な奴だ」
「違うのっ！園原さんは、自分がイジメられることわかってて私を助けてくれたんだよ！強いよ…私なんかより、ずっと強い…！」
すると、咲夜は少しふっと笑った。

「咲音」
「ん？」
「お前は、人が良すぎるな……」
そう言うと、咲夜はホームに消えていった。

「咲夜ちゃん……」
わかってくれたのかな…？

――…「咲夜ちゃんは群れる人とイジメが大嫌いだけど……咲夜ちゃんは絶対に、貴女を助けてくれる」
あの時、あんな風に咲夜ちゃんのことわかったように言っちゃったけど…
私、まだまだ咲夜ちゃんのこと何にもわかってないな…

考えてみれば、家も、家族も、前の高校も…咲夜のことを何もしらない。
そんな咲音には、咲夜の考えていることがまるでわからなかった。

＊＊＊

次の日の昼休み、咲夜は実姫に屋上に呼び出された。

「……何で屋上？」
咲夜がパンを食べながら問う。
「那津希達がめったに来ない場所って言ったら、ここしか思いつかなかったの」
「ふーん…で、話って何？」
「あの、さ…あたしが今那津希達にイジメられてんの、知ってる？」
咲夜はパンを食べる手を止めた。
「…知ってる」
「てかっ、相談したい訳じゃないの！あたしは関わらなくて良いって言ったけど、有栖川さんに神名さんに話してみてって言われたから――」
「わかってるよ」

「へ？」
「お前があいつらにイジメられてんのを見ない振りすることも出来ねーしな…」
「え……」
「正しいことをした奴が、何で責められなきゃいけないのか…、間違ったことをしてる奴が、何で少しも傷つかずに、威張っていられるのか…。それを変えるために、私を呼んだんだろ？」
「う、うん…」

咲夜は、実姫と咲音の想いをちゃんとわかっていた。
「…きょ、協力してくれる…かな？」
「土下座して頼むんならな」
「は？」
「嘘だよ」
「何それ…」
「よし、さっさとあの那津希とかゆう奴をぶっ潰すぞ」
咲夜はドアを開けて中に入っていった。
「ちょ、ぶっ潰すってあんた…」
実姫もその後を追った。

そして、放課後…

「やっぱり、まず最初は那津希にイジメをやめさせることだよねぇ…」
何故か亜弥加が仕切る形になっている。
「いきなり、そんなことできるかな…？」
咲音が反論した。
「無理？」
「あたしらが何言っても那津希には効かないかもなー…」

実姫が呟く。
あれから4人が合意した上で、放課後の教室で話し合っているのだ。
「咲夜ちゃんはどう思う？」
咲音が振った。
「…。要は、あいつが1人で威張れないようにすりゃ良いんだろ？」
「うん……よーするに？」
「あいつの仲間を、消す」
「け、消すって…まさか…っ
「ちがうよ」
否定したのは実姫だ。
「あたしがやったみたいに、皆が那津希に刃向かえば、那津希の味方は誰も居なくなる」
「そーいうことだ」
「…でも、どうやってそんなこと仕向けんの？」
今度は亜弥加が訊ねた。
「難しいと思う…特に莉奈は、1年の頃からずっと那津希と一緒に居るし」
「そだ、実姫、あの人達のこと色々教えてくんないかな？」
「ん、分かった…」

徳森那津希、鈴原莉奈、坂蔵カナ、神崎茜、並木梓、そして園原実姫の6人組は、高2になってからすぐに出来た。
1年の時からクラスが一緒だった那津希と莉奈は特に仲が良く、部活も一緒で、それはカナも一緒だった。
1年の終わりごろには友達の紹介などでお互い仲良くなり、今に至

っていた。

「あたしは、梓と一番仲が良いの。だから、あの子を味方にすることは出来ると思う…」

「ほんとに！？」

咲音と亜弥加の声が重なった。

「実際ね、あたしを直接イジメてくるのは、那津希と莉奈しか居ないの。他はとにかく無視って感じで。梓は時々話してくれるけどね」

「そっか…じゃあ、坂蔵さんと神崎さんと並木さんなら味方に出来そうってこと？」

「でも、カナと茜は大分那津希派だから…」

「そっか…」

「…まぁとにかく、話してみるっきゃないよ！」

亜弥加が締めくくって、最初の話し合いは終わった。

咲夜が梓のことがあまり気に入らなかった。実姫と仲が良いのに那津希達と一緒に居て、イジメを止めさせようとしないからだ。

でも今は、１人でも多く味方を増やさなければならない。

咲夜は那津希の仲間を消すと言っただけで、自分達の仲間に引き込むのは群れてるみたいで嫌だと言っていたが、那津希のグループを崩すためだと言って皆で納得させた。

＊＊＊

そして、作戦実行当日。

今日は、何としても梓を説得する。

「梓…ちょっと良いかな？」
昼休み、実姫は梓を呼んだ。
那津希が睨んで来たので、その視線から隠れるように教室の隅へ移動する。
すぐ側には咲音と亜弥加も居る。
那津希達には声が聞こえない距離だ。

「どしたの？実姫…」
「…ねぇ……いつまでも、那津希の下に居るつもり？」
「え……」
「ごめん、責めてる訳じゃないんだけどさ…このままで、良いと思ってる？」
実姫は少し強気に出た。
「…あたしは、良いとは思わないよ。でも、今更那津希を裏切るのも…」

――やはり。また、那津希の影響なのか。
皆、あいつに染められている。
あいつさえ、居なければ…

…ううん、そんなこと考えたって意味ない。

「あたし達と一緒なら…大丈夫と思わない？」
「え…？」
その言葉で、咲音と亜弥加、そして咲夜が近くに来た。

「皆、味方だから」

実姫は優しく言ったが、梓は黙って俯いた。

「並木さん、私達に、協力してもらえないかな…？」
「…でも、実姫みたいに、あたしまでイジメられたら…」
梓の言葉に、咲夜は少し顔を歪めた。
「大丈夫だから……」
咲音が言うと、梓はゆっくりと顔を上げた。
「一緒に、頑張ろう…？いつまでも、徳森さんの勝手にさせちゃいけない」
「うん…」
梓は頷いた。

「…っ、ごめんね、実姫…助けて、あげられなくて…」
「梓……」
「あたし…実姫のこと、少し羨んでたのかもしれない…あと、あたしだって那津希のグループから抜け出したかったのに、なんで実姫だけ…ってね。
でも…あたしには、勇気が無いだけなんだってわかった。那津希に逆らう勇気が…」
それから梓は少し微笑んだ。
「なんか、わかった気がするよ…皆と一緒なら大丈夫って。ありがとう、アリスちゃん、神名さん。それと、今まで本当にごめんなさい…」
梓は心から謝罪してくれているようだ。

「そんな謝る必要ないよ…私、並木さんにイジメられたことないし、イジメてるの見たこともないんだから」
そう…彼女はただ、勇気が少し足りなかっただけ。
那津希のイジメを、心を痛めながらも側で見ていることしか出来なかったのだ。
「でも、何も出来なくて…あたし、本当は助けなきゃダメだって思

ってたのに…っ」

梓は泣きそうになりながら言った。

今まで留めていた思いが、一気に噴き出したのだろう。

「大丈夫、その気持ちだけでも凄く嬉しいから」

咲音は微笑んだ。

――並木さんは本当は良い人なんだ。ちょっと誤解してたかな。

徳森さんに逆らいたいけど逆らえない人って、結構居るのかもしれない…。

第6話　最終手段

「咲音、来るよ…」
その時、亜弥加が耳打ちした。
「え？」
ふと目をやると、那津希達が近づいて来ていた。
そして、咲音達の前に立った。

「どういうつもり？梓。あんたまで、あたしに逆らうって訳」
梓はまた俯いてしまう。
やはりまだ那津希が怖いらしい。
その表情は、とても悔しそうだった。

「実姫と梓も引き込んで…何の真似よ、アリスちゃん、神名さん？」
そう言って2人を睨む。
「…ま、待って那津希！この2人を責めることないでしょ！？」
梓が、今2人にもらった勇気を振り絞って、叫んだ。

「へぇ…こいつらの味方するんだ」
那津希の怒りが膨れ上がっているのがわかった。梓を睨みつけている。
そして……

「あんま調子乗んなよ…！！！」
那津希が梓に手をあげた。

「那津希！やめなって！！」

実姫が叫ぶも、意味はなかった。

パンッ！！！——

——あ……

その場に居た全員が、唖然とした。

那津希に頬を殴られたのは——…

咲夜だった。

「…！！神名さん！！！！」
梓は咲夜が自分の身代わりになってくれたことが信じられなかった。
そして、殴った本人も驚きを隠せないようだ。
「何の…つもり……？」
「咲夜ちゃん……」
咲夜は那津希と梓の間に立ち、殴られた頬を赤くしながら、真っ直ぐに那津希を見据えた。
「お前に、こいつを殴る資格は無い…」
「はぁ？何言ってんの」
「級長だかなんだか知らねーけどな、自分に逆らったら制裁を与えるのか…ふざけんな」
「……」
「権力で、力で皆に言う事聞かせて…何が楽しいんだよ？何も悪いことしてない奴らをイジメて、何か意味あんのかよ？私はいい…でも、咲音や園原、並木にお前が手を出す権利は無いはずだ」
咲夜が厳しく那津希を睨み付ける表情とは対照的に、那津希は薄笑いを浮かべていた。
「そうねぇ…あんた、今年転校してきたからそういう風にしか考えらんないのかもね…」
「？」
「級長のことを何にも知らないってことよ。どんな理屈を並べても、あんたはあたしに逆らえない」
那津希はさらに口角を上げた。
「級長全員を敵に回すことがどういうことか…分からせてやるわ」

「……」
咲夜が黙っていると、那津希は仲間を引き連れて去っていった。
「…咲夜ちゃん、大丈夫？」
咲音は咲夜の頬の痛々しい傷を見て言った。
「……あぁ、平気だ…」

「庇ってくれてありがと、神名さん…」
梓がおずおずと言った。
「でも、まずいよ…いくら神名さんでも、級長全員が敵じゃ、ヤバいって…」
段々と怯えるような声に変わる。
「どうすれば良いの、あたし達…」
実姫も不安を隠せないでいた。
「ごめん、私が――」
「咲夜ちゃんは悪くないよ」
言葉を遮ったのは咲音だった。咲夜を見て、ニッコリと笑う。
「あ…うん、あたしもそう思う」
梓が続く。
「このまま何も出来ないの嫌だったし、神名さんが那津希にあぁ言ってくれて…嬉しかった」
「あたしも、あの時有栖川さんを助けたこと、後悔してないよ。神名さんみたいな人が居てくれて、本当に良かった」
実姫が言った。

「……」
咲夜は驚いたように梓と実姫を交互に見た。
「…あり、がと……」
「よーし、こうなったらとことんやってやろうじゃんよ」

「え？」
突然亜弥加が勢いづいて言った。何故か笑顔だ。
「級長制度壊滅！！」
亜弥加はビシッと親指を立てた。
「あぁ」
「うん！」
咲夜と咲音も同意する。

実姫と梓が顔を見合わせた。
「あたし達も、協力するよ」
「うん」

「あの…」
そこへ、一人の女子生徒が近付いて来た。
「神名さん…私、高月裕子（タカツキユウコ）って言います。良かったら、裕子にも協力させてくださいっ」
裕子は深々と頭を下げた。
「！」
「徳森さん達が怖くて近付けなかったけど…裕子、ずっと神名さんに憧れてたんです。だから…」
「…あぁ、ありがとな」
咲夜は微笑んだ。すると裕子の顔がパァッと明るくなった。
「ありがとうございます！嬉しいです！あの、咲夜ちゃんって呼んでも良いですか！？」
「え、あ、あぁ…」
いきなりのハイテンションにたじろぐ咲夜。
「裕子に出来ることがあれば何でもします」

「あの…有栖川さん」
「！…」
続いて、あの時咲音に酷いセリフを言った女子達がやって来た。
「この前は最低なこと言って、本当にごめん…あたし、自分のことしか考えてなかった」
「直接害は無くても、やっぱ那津希は許せないと思う」
「もう那津希に従ったりしないから…」
「あたし達にも、協力させてくれるかな？」
咲音は一瞬信じられない思いだった。女子達の言葉を理解した後、嬉しさが込み上げて来た。
「…ありがとう、皆…っ」
咲音は泣きそうな気持ちで感謝した。
――信じていれば、きっと道は切り開ける。
ありがとう……
そんな様子を教室の外から見ていた一人の男子生徒は、不気味な笑みを浮かべるとその場を去った。
――面白くてたまらない…
そんな表情をしながら、天馬戒はこれからの展開に期待していた。

＊＊＊

咲夜は保健室に行った後、クラスの雰囲気も考えて早退することにした。
午後の授業はものすごく険悪なムードだったが、その日のうちに那

津希が行動を起こすことは無かった。

＊＊＊

それから休日が明け、さらに二日後。何となく日常になってしまい、咲音達はテラスで昼食を食べていた。
今日もこれと言って何も起こらなかった。実姫と梓は二人でガードを固め、那津希達とは全く話さないようにしていた。
今日はいつもの三人に＋もう一人。

「テラスでお昼御飯も良いものですね…」

お茶を啜りながら和みまくる女子生徒、高月裕子。彼女は本当に咲夜のことが好きなのか、よく一緒に居た。
クラスの生徒達は何かに吹っ切れた様子で、咲音や咲夜達に話しかけて来てくれる。
たとえ級長全員が敵になろうと、皆一緒なら心配ないと思ったのだろう。

「お前、こんなに私達と一緒に居て危機感は無いのか？」
咲夜が聞いた。
「そんなのありませんよ～。徳森さんはあぁ言ってましたけど、本当は多分もう――」
「あれ、仲間出来たんじゃなかった？何でまたテラスで食べてんの？」
「！！」

いきなり目の前に現れたこの男…天馬戒。
「…お前には関係ないだろ」
「相変わらず冷たいねェ……――ん、なんか違う奴も居るみたいだね…へェ」
そう言って天馬は意味あり気に裕子の方を見た。
「……」
裕子は天馬を睨み付けた。

「…？」
この二人、何か関係あるのかな？
咲音は疑問に思ったが、天馬がすぐに話題を振った。
「級長の掟にはこんなのがあるんだよ。知ってるか？」
唐突に話し出す。
「？」
「クラスの3分の2以上が級長に従わなくなった場合、その級長はその権利を奪回され、クラスで決められた新たな級長に譲られる」
「！」
「そう！だからこのまま行けば徳森さんが級長を降りるのも時間の問題なんですよ！クラスの支持率も確実に下がってるはずですし」
3人は知らなかったが、裕子は知っていたらしい。
「だろうね。…でも、那津希チャンはしぶといコだからねェ…。何が何でも、他の級長達を使うよ」
「……」

「それで、定期的に行われる級長会があったのが、昨日」

「！」

4人は顔を見合わせた。嫌な予感がする。
「やっぱり、那津希チャンは君達のことを話してたよ。それは凄い

勢いで」
天馬は笑顔を崩さない。
「級長は一心同体なんだよ。掟で決まってるからね。だから…
残念ながら、俺らの敵」
満面の笑みを浮かべる天馬の背後に、いつの間にか5人の男子生徒が立っていた。

「……！」

咲音は寒気がした。予想はつく。この5人、全員級長だ。
見るからにガラの悪そうな5人。髪が赤いのや白いのも居る。

「那津希チャンからのご指令は、君達を『学校に来られなくすること』」
「…なん、だと……」
咲夜でさえも引き下がる。いくら咲夜でもこの人数相手では危険だ。
「そっちの二人は逃げとけ。お前らの名前はねェからな」
二人とは、亜弥加と裕子のこと。
「ど、どうしよ…」
急展開に戸惑う。
「…行け」
咲夜が言ったが、二人はなかなか動かない。恐怖で動けないというのもあった。
「いいから、行け。早く…」
「う、うん…」
その場に居てもどうしようもないと、亜弥加が足を踏み出した。裕

子もそれに続く。
二人が校舎の入り口まで来た時、
「スト～ップ」
「！？」
呑気な声でそう言ったのは、赤毛のヤンキー。
「逃げろっつっても、そこまで。助け呼ばれちゃ困るかんね」
「じゃ、俺興味ねぇから見張っとく」
天馬がそう言うと、少し離れた。
――神名咲夜…
コイツなら、この人数でも逃げることは出来るだろう。だが、あっちの有栖川咲音。あのお嬢様はどう考えても無理だ。
天馬はククッと笑った。
――見せてもらおう…
一人でずる賢く逃げるか、有栖川咲音を庇って二人ともやられるか。
どうする？神名咲夜……

＊＊＊

「ねぇねぇ園原さん、咲夜ちゃん達知らない？」
昼休みが始まってからしばらくした時、一緒に弁当を食べようとしていた女子の一人が実姫に聞いた。
「あ、神名さん達ならテラスで食べてるみたい」

「テラスか！ね、あたし達も行こうよ！」
「良いねぇ！行く！」
女子達は支度を始めた。

「行くな！！」

それを聞いていた那津希が突然叫んだ。女子達はビクッと固まる。
「どうしたのよ、那津希」
実姫が聞いた。
「……」
那津希は答えようとしない。実姫は不審に思った。
「ちょっと那津希！あんたなんか変なこと企んでんじゃないの！？」
「…うるさい！だから何だよ！！」
「ほんっとに…最低ね」
実姫は溜め息をつくように言った。
「…止めに行く気？」
那津希は冷静さを取り戻すと、ふっと笑って言った。
「当たり前でしょ」
「何考えてんのよ。男の級長よ？それも6人。あんたの相手になる訳ないじゃない」
「……」
実姫は那津希を強く睨み付けた。

「皆！！神名さん達が…級長にやられちゃう！！もう学校に来れなくなるかもしれない！！」
実姫は教室に声を張り上げた。
「一人じゃ級長達にはかなわないけど…皆一緒ならなんとかなるよ！！だから…」
「そんなことしても無駄――」
那津希は誰も協力する訳がないと踏んでいた。

「マジかよ！ヤバくね？それ」
「行った方が良いんじゃ…」
「めっちゃ卑怯じゃん！ムカつく！」
「助けに行かなきゃ…」

女子からも男子からも声が上がった。
「……」
那津希は耳を疑った。
「どこ！？」
「テラス！！」
「どうすんの！？」
「わっかんねーよ！！けど…」
皆バットやラケットなど各々武器を持ってテラスに向かおうとした。
「ちょっと様子見て、作戦練らねぇと…」

準備をし、教室から出て行く。
「…めて、よ…」
一人席に座ったままの那津希は、小さな声で呟いた。
「やめて…やめてよ…！！」
今度は大きな声だったが、耳を傾ける者は一人も居なかった。
「……っ…！」
数秒のうちに、教室には那津希、周りに莉奈、カナ、茜しか居なくなった。
そして、もう一人梓がまだ残っていた。

「…皆、あの昼休みのこと見てたから。皆那津希が悪いと思って、神名さん達の味方になったの」
梓は淡々と話す。
「もう、那津希の言う事聞く人なんか、誰も居ないよ」

「！…」
「…梓、あんた調子に乗ってると…」
莉奈が睨んだが、梓はもう怯まなかった。
「間違ってるのはあんた達だよ！後悔するのも謝るのも、全部そうだよ！！」
梓はそう言い捨てると、走り去った。
「……」
那津希は何も言うことが出来なかった。

怖い。まず顔が怖い。この人達本当に高校生？
てゆうか目が怖い。人間じゃない。怖すぎる。

咲音は恐怖に立ちすくみ、さっきから頭の中でそればっかり繰り返していた。

「とりあえず、そっちの神名咲夜ちゃん？まずはお手並み拝見かな」
赤毛が言った。何するつもり…？
「おい、片方押さえとけよ」
「命令してんじゃねぇ」
赤毛が言うと、愚痴りながらも長髪の男が咲音に近付いて来た。
――ななな何、何、何っ！？
同時に、赤毛が素早く咲夜と間合いを詰め、いきなりストレートを放った。
「っ！」
咲夜はとっさに避ける。
「咲夜ちゃ…、…っ！」

咲音は長髪の男に羽交い締めにされた。口を塞がれる。
「んん、がっ…」
必死にもがくが、びくともしない。
「うるせぇ、大人しくしてろ」
――嫌、嫌だ！怖い！！
足　震えてるし…も、動けない…！
咲音は恐怖のあまり全く動けなくなってしまった。

「いきなり何すんだ、てめぇ…」
「ふーん…結構やるなぁ」
マイペースに感想を述べる。
「じゃ、コレは？」
言うと同時に右手の拳が咲夜の顔面に迫る。
「くっ」
咲夜はかろうじて両腕をクロスして防いだ。だが、かなりのダメージだ。
再び前方を見ると、連続で左手が飛んできた。
「！！」
腕の防御だけでは防ぎ切れなかった。
咲夜は地面に尻餅をついた。
「くっ……」
「んんーっ！！」
咲音は言葉にならない叫びを上げる。

「上半身まで倒れなかったのは凄いな」
赤毛の目は笑っていた。
周りの男達はギャラリーのように二人を見ている。
「2分持ったら俺に交代なー！」
という声もする。

赤毛はよろめきながら立ち上がった咲夜に近付いていった。
「ん…まだ顔の傷残ってんだな」
「！」
「那津希の殴りじゃすぐ消えるだろ。俺ので残しとくか？”名誉の傷”」
赤毛はニヤリと笑った。

「…っ」
――やめて…やめて、お願いだから…
咲音はギュッと目を瞑って、再び開いた。でも、目の前の景色は何も変わらない。

「避けるだけか？向かって来いよ」
次々と放たれる拳や蹴りを、咲夜は反射神経だけを研ぎ澄まして避け続ける。
だが、少なからず体にも受けていた。

「ハァ、ハァ……」
少しずつ咲夜の動きも鈍くなってきた。
「おいー！そろそろ代われよ！」
先ほどからやたら戦いたそうにしていた茶短髪の男がまた叫んだ。
「まだ。そっちの奴んとこ行けよ」
赤毛はそう応えた。
「ちっ…ま、いいか」
茶髪の男が咲音の方に近付いて来た。
「おーい戒、コイツどうすんだよ？」
「知らねー、勝手にしろよ」
「ふーん…」
茶髪男は考える仕草をした。

「じゃ、とりあえず貸して」
「……」
長髪の男は黙ったまま咲音の背中を思いっ切り押した。
「いたっ…」
咲音は茶髪にぶつけられる。
――人を物のように…
酷すぎる…！

茶髪は咲音の顔をまじまじと見てきた。
「……」
「…やっぱ不登校にさせんのはもったいねぇよなぁ」
「！？」

「徳森に目つけられたくねぇんなら…俺の言う事全部聞くとか」
――な、何この人…
「誰が…」
咲音がそう言って茶髪を睨んだ瞬間、体ごとテラスの端に持っていかれた。
そのまま縁に押さえつけられ、首根を掴まれる。
「……っ…」
体を直角に曲げられた咲音の目に映ったのは、直下に広がる硬いアスファルト。
咲音は絶句した。
足が浮いてくる。
心臓が波打ち、恐怖以外の感情が全て吹き飛んだ。
「怖い？」
「…ぁ……っ」
ここは４階の高さのテラス。それに、今は普通に下を見る時よりも何倍もの怖さがある。
「俺を敵に回さねぇ方が良いと思うけどな…」

この男、明らかに咲音の怖がり様を楽しんでいる。
「…本当にてめーは悪魔だな。大魔王…？」
長髪男が呟いた。

バキッ

「！」
偶然だが、咲夜の右拳が赤毛の頬に命中した。
「いって～…」
一瞬よろけるが、倒れはしない。むしろほとんどダメージを受けていないように見える。
――隙をついて逃げるしか無い…でも、咲音が――
あの茶髪、本当に咲音をテラスから落としそうな勢いだ。危険すぎる。

「フッ、俺様の顔に傷つけるとはな…
ちょっとキレんぜ」
赤毛は不気味に笑う。
「女子に本気で殴んのはあまり望まねぇけど…級長絶対使命だから仕方ねぇ。
俺もまだ級長辞めたくねーんでな」
言い終わった瞬間、赤毛は凄い速さで咲夜の背後に回り込んだ。
「！！」
ゴッと背中を殴られる。
「うっ！」
咲夜は地面にうつ伏せの状態で倒れ込んだ。

そのまま足で踏みつけられる。
「どうしてやろうか…」
赤毛は残酷な笑みを零す。先ほどまでよりさらに悪が増している。
――クソ…
その時だった。

バシャッ――
「！？」
「！」
「ぶわっ、冷てー！」
赤毛が叫ぶと、咲夜の上から飛び退いた。
――何だ…？
上体を起こし確認すると、彼の赤い髪が濡れていた。
「何しやがんだ！クソッ」
言いながら水が飛んできた方向を見やった。

「うわっ！何だよ！？」
「！…」
咲音を押さえ付けていた茶髪、続いて長髪男も水の攻撃を受けた。
解放された咲音は崩れ落ちるように座り込んだ。
――何…？

テラスより４ｍほど高くなった場所…給水塔が設置されている棟の上に、ホースを構えた生徒が数人立っていた。テラスにいた全員が注目する。

「！みんな…」
それはクラスメートだった。
そこに、実姫がひょっこり現れた。
「あんた達、何やってんのよ！？女の子を男６人で襲うなんて…卑怯よ！！」
「んだてめーは」
髪の水を払いながら赤毛が言う。
「水！！」
実姫の合図と同時に容赦なく彼らを水が襲う。
その隙に、亜弥加達が居た入り口とは別の入り口から潜んでいた女子生徒が咲音と咲夜の元へ駆け寄り、離れた場所へ避難させた。
男達は天馬以外全員水浸しになった。
「くっそ…」
「今よ！！」
すると、女子が出て来た入り口に控えていた男子生徒達が大量に飛び出す。バットやラケットの他に、竹刀、ボール、何故か黒板消し、辞書など、あらゆる道具を武器化して、怯んだ級長達に一気に襲いかかった。
２０人近い生徒達の猛攻撃に、級長は反撃することが出来なかった。
「おい！引くぞ！」
一番被害の少なかった天馬が叫ぶと、亜弥加と裕子を押し退けて校舎に消えていった。
それに続いて他の級長達も走り出した。
合計５人の男が入り口前に結集した時…
「せーのっ」
「！？」

頭上からの声とともにこれでもかという大量の水が降ってきた。
「ぐわっ」
男達は逃げるようにテラスを後にした…。

「……」
咲音は嵐のようなその光景を、呆けながら眺めていた。先ほどまでの恐怖も助長してか、級長が去った後も動けずにいた。
「神名さん！有栖川さん！」
実姫を先頭に、クラスメート達がこちらに向かって来た。
「大丈夫だった！？」
「変なことされてない！？」
「怖かったよね、もう大丈夫…」
皆が次々と声を掛けてくれる。徐々に安心感が湧いてきた。
「うん…ありがとう」
「お前ら、すげーな…」
「ふふっ、あたしが作戦考えたのよ。那津希が何か企んでたみたいだったから」
実姫が自慢気に言った。
「久々に暴れたなーっ」
「かなりすっきりした！！」
「つーか級長に勝ったよな！」
男子達は歓喜の声を上げた。
「かなり一方的だったけどな…」
咲夜が苦笑して言った。
「何言ってんだよ、助けてやった恩人だろ？」
「あぁ、感謝してるよ」
男子達は照れくさそうに笑った。
「俺達超かっこ良くねぇ？」
「何、ナルシスト？」

皆は互いに笑い合った。

――皆が、ひとつになった…。

咲音はそう感じた。

総勢３６名による救出劇は、見事に成功した。

第7話　確かなこと

コツ…

足音がして、誰かが出て来た。

「徳森さん…」

後ろには他の3人も居た。

「廊下歩いてたら…あいつらがびしょ濡れになって走ってた」

那津希は俯きながら話し始めた。

「本当に、勝っちゃったのね…」

その目は、悲しさとも寂しさともつかぬ複雑な色をしていた。

「もう…良い。もう、やめるから…」

たどたどしく呟く。

「あたし…級長降りる」

「！」

それだけ言うと、那津希は校舎に戻っていった。莉奈達もそれに続いた。

＊＊＊

昼休みの事件が教師達にバレることは無かった。午後の授業は、全く持って普通に行われた。

ただ、那津希達4人がごっそり居なくなっていた。

「咲夜ちゃん」
「ん？」
薄暗い帰り道を、２人で歩く。
「徳森さん達…どうしたんだろうね」
「…知らねー…心配なのか？」
「いやっ、別に、そういう訳じゃないんだけど…」
少なからず気にかかっているのは事実である。
「ほっときゃ良いよ…ただ授業受ける気なくて帰っただけだろ」
「うん……。
徳森さん、級長降りるって言ってたよね。もう、イジメとか…なくなるかな？」
「…私には断言出来ないけど…あいつも、そこまでバカじゃねーだろ…。クラスメートがあんだけ信用してないんだ、無理矢理でも級長は降ろされるだろ。級長でもないのにイジメが再開したら、今度は徳森が皆の敵になる」
「そっか…皆、徳森さんのこと、本当はよく思ってなかったんだもんね…」
咲音がそう言うと、咲夜が顔を覗き込んできた。

「…　どしたの？」
「お前、何考えてるんだ？」
「へ…？」
「あいつが可哀想…って言ってるように見えるぞ」
「そ、そうじゃなくて、ただ…」
「ただ…？」
「これで、良かったのかなって…」
「……」

「なんか…今度は皆が徳森さんをイジメそうで…」
「…そうだな。私もそうなるのは不快だ。でも、お前が心配することじゃない」
「ん…」
「そんなに考えなくても、明日になればわかることだ」
「…そ、だね」

――私達は、徹底的に徳森さんを陥れるために頑張ってた訳じゃない。
もうあんなこと、二度と繰り返したくない…。

「結局、級長制度をなくすことは出来なかったね…」
「あぁ…でも、何かが動き出すよ、きっと」
「あ…新しい級長決めなきゃいけなくなるよね？咲夜ちゃんがなればいいじゃん！そしたら――」
「私はやらない」
「え…」
「そんなの私に出来る訳ねーだろ」
「そうかな…」
「好きじゃないんだよ」

――残念。
…まぁ、なるようになるかな。

＊＊＊

あれから那津希達はすぐに学校を出た。教室に居たくなくて帰るこ

とにしたのだ。
「那津希…どうすんの？」
莉奈が聞いた。
那津希がものすごく速く歩いていくので、莉奈達も頑張って歩いた。
「どうするって…何が」
「だから、これから。級長のこととか…」
「降りるって言ったでしょ！」
那津希の言葉に、3人はビクッとした。
「3分の2どころか、全員よ。あたしに従う人なんか1人も居ない」
「でも…」
「あんた達も、もうついて来なくて良い。今までごめん、無理矢理言うこと聞かせたりして」
「那津希！」
「何…」
莉奈が呼んだので、那津希は立ち止まって振り返った。
「謝んないでよ…無理矢理なんかじゃ無い、あたしは自分の意志で那津希について来たんだから！」
「…あたしも」
「あたしも！」
カナ、茜もそれに続く。
「……」
「皆がどう思ったって、あたし達は那津希の味方だから」
莉奈が言うと、残りの2人も頷いた。
「莉奈…カナ…茜…」
那津希は3人の顔を順に見回した。
「……ありがと」
3人はニッコリと微笑んだ。

次の日、咲音は心配していたが４人共学校に来た。
やはり誰も近付こうとはしない。皆気付かない振りをしている。
しかし……

「那津希。あんた、自分がしたことちゃんとわかってるよね」
まだ怒りが拭えない実姫が那津希の机に手をついて言った。
那津希は少し笑うと、
「実姫も随分言うようになったのね」
と言った。
「はぁ？何…」
「ごめん。あたしが全部悪かったよ」
「！」

「お前ホントに反省してんのかよ！？」
「そうだよ！」
「もっと腹の底から謝れよ！」
クラスメートから罵声が飛ぶ。
那津希が怖くなくなった今、抑えていたものが吹き飛んだのだろう。

「……」
――違う、私が望んでるのは、こんなことじゃない…
咲音はその様子を見ていられなかった。

「もう止めて！！」
全員が反応する。
「もう、いいの。
私は大丈夫だから…

もう、おんなじこと繰り返すのは、嫌だ…」
――誰も、仲間外れにされないように。
皆が、誰かを恨むことがないように。

「……」
教室が静まり返る。

「…わかった」
最初に口を開いたのは実姫。
「もう、争いごとは無しにしようか」
クラスの皆も、納得したようだった。
咲音はほっとして微笑んだ。

「…なんで」
そう言ったのは那津希だった。
「え？」
「なんで、許せるの？あんた、あたしのこと恨んでるでしょ？嫌いでしょ？なんで、そんな風に笑えるのよ…！」
問い質しても、咲音は優しく微笑むばかりだった。

――なんで…

「許すのに理由なんかいらねーだろ」
「！」
席についていた咲夜が頬杖をつきながら言った。
「お前が間違いを認められたら、それでいい。
これからまた、新しく生き直せばいい」

「……」
那津希は驚いていたが、すぐに泣きそうな表情になった。
「うん……」
咲夜はふっと笑った。
「わかったら、皆に謝れよ」
「え　あ…
うん」

那津希は皆に向き直る。
「…今まで、本当に自分のことしか考えてなかった…他人の気持ちなんか二の次で、自分のやりたい放題にやって…。
それが、間違ってるって、やっとわかった。自分バカだったって思う…。
本当に……ごめんなさい」

皆が那津希を受け止められるまで、時間はかかるだろう。
でもきっと、もう大丈夫。
彼女は、太陽に向かって歩き始めたのだ。太陽に照らされて、いつか、輝けるようにと――…

第8話　新級長

「それでは、話し合いを始めます」
それから数日後の放課後、解雇された那津希の代わりの新級長を決定する話し合いの場が持たれた。
生徒だけの機密事項なので、もちろん先生は居ない。
進行役は、特に誰でも良いのだが一応ＨＲ議長。

「まず、立候補は…」
当然だが、手を挙げる者は居ない。
「…えー、では推薦」
何となく言いづらいのか、誰も手を挙げない。

「神名さんがやればいいんじゃないの？」
那津希が手も挙げずに唐突に咲夜を推薦した。
「お前、何考えてんだよ？」
「何って何よ。ピッタリだと思うけど。うん」
そしてパラパラと同意の声が漏れる。
「待て。私はやらない。私にそんな役は向いてない」

――皆言ってるんだし、やっぱり咲夜ちゃんが適役だと思うんだけどな…。

そんな呑気なことを考えていた咲音は、咲夜の素っ頓狂なセリフに腰を抜かした。

「咲音がやれば良いだろ？」

…は、は、は？
「はぁぁ！！？」
今までで一番激しい突っ込みかもしれない。
「そんなに驚かなくても…。
…お前が級長なら、色々と安心だろうしな」
「ちょ、ちょっと待っ…、咲夜ちゃんが向いてないんなら、私なんか一億倍向いてないよ！！」
「一億倍てあんた…」
亜弥加が呆れて言った。
「でも、良いかもしんないね」
亜弥加は面白いことは徹底的に楽しむタイプなのだ。
「あ、亜弥加ぁ…？」

咲夜がどうしてもやりたくないと言うので、「しょうがないから有栖川にやってもらうか…」という空気が教室に充満した。
「でもま、有栖川が級長になれば平和になりそうだしな」
「悪かったな暴力的で」
男子の言葉に那津希が突っ込んだ。
「歴代Ｎｏ．１平和的な級長？歴史に残るな」
笑いながらだが結構本気だ。
――な、何勝手なこと言ってんの…
「宜しくお願いします、咲音ちゃん」
裕子にまで言われちゃ救いようがない。

「じゃ、頼むよアリスちゃん」
「そ、園原さんがやれば…」
「あたしは有り得ないから。あいつらと同じ役職っていうのが嫌。

だから宜しくね」
他のクラスの級長が苦手なのは私も同じだよ！ていうかどう考えても私のが嫌だよ！と言いたかったが言えなかった。
咲音の頼まれると断れない性格が災いした。

「では、新級長は有栖川咲音さんということで良いですか？」
「いいでーす」
「では解散」
あっさりと決定してしまった。

「あ…有り得ない……」
「ま、ドンマイだねー」
亜弥加に凄まじく軽く返された。
「何にやけてんの亜弥加」
「べーつにぃ？まぁ何とかなるよー、咲音だし」
意味が分からない。

「面白いことになったわねー」
那津希が声を掛けて来た。もはや頼れるのはこの人しか居ないかもしれない。
「と、徳森さん…
私なんかで良いの？あなたみたいな人の跡を継ぐのが、こんな私で良いの！？」
「うん、楽しみだから」
は！？
「あんた、何か他とは違うモノ持ってると思うよ。あんたなら、何か変えられるはずだから…」

「期待しないで、お願いだから…」
「あんたなら大丈夫よ。奴らは相っ当曲がり者で生意気で厄介で面

倒くさくてうざったいけど、何とかなるって」
何とかなる気が微塵もしないんですが…。

四面楚歌。
もう受け入れるしかない。

「亜弥加…私、やるよ」
「やっとやる気んなった？」
「他の級長達がもし何か悪いことしてたらやめさせたいし、もうあんなことが二度と起きないようにしたいし！」
こうなったら、とことんやるしか無い。

――咲音、あんたって妙に怖がりのくせに勇気あんのよね…。
亜弥加は呆れながらも感心していた。

「頑張れよ、新級長」
そこへ咲夜がやって来た。
「咲夜ちゃん…」
「お前なら大丈夫だ。何かあったら、すぐ私に言えよ」
「うん、ありがとう…！」

こうして、2年C組の新級長が誕生したのだった…。

慌ただしく日々が過ぎ、一学期が終わった。
そんなに正式な組織という訳でもないので、咲音の級長就任は二学期からということになった。

夏休みの間、咲音は何度か咲夜を遊びに誘ったが、全て断られてしまった。考えてみれば、咲夜と学校以外で一度も会ったことがない。学校帰りに少しだけどこかに寄るくらいだ。

咲夜の家のことも、家族のことも、過去のことも…まだ何も知らない。自分からは話したくないようだった。

裕子も咲夜を誘ったが断られたらしく、代わりに咲音が何度も遊びに連れて行かれた。

「咲夜ちゃん、今日も忙しいんですかねぇ…」
皆で海に遊びに行った時、裕子がぼやいた。
「うーん、どうだろ…」
――咲夜ちゃん、こういうの苦手だろうしな…。
「神名さんは海ではしゃいだりしないでしょ～」
ある女子が言った。
「ぶー」
裕子は子供のように膨れた。

結局、夏休み中は一度も咲夜に会えなかった。

――そして、今…

二学期が始まった。

――ついに、始まってしまった。
地獄の二学期が。

咲音はそんな風にしか考えられなかった。二学期は行事が盛り沢山、大いに楽しめる時期…ではあるが、咲音は“級長”という役職に就かなければならないのだ。

「はぁ…嫌だ嫌だ」
咲音は溜め息をついた。

「咲夜ちゃぁ～ん！！！」
「うわっ」
その時、学校に来た咲夜にいきなり裕子に抱きついた。

「咲夜ちゃ…」
夏休み中一度も会えなかったので、咲音も一番早く咲夜に話し掛けたかったのだが…

――て、あれっ
私焼き餅焼いてる？

騒々しく幕を開けた二学期。

これから先にどんな出来事が待ち受けているのか

まだ咲音は知らない…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1399z/

月明かりの夜

2011年12月5日19時52分発行